

中学校美術・陶芸授業における共同学習の取組

—人間関係形成力促進を目指した大学教員等との協働の試み—

The Efforts of the cooperative study about the junior high school art・ceramic art class
— The trial of the cooperation with the university teachers
who aimed to promote human relations formative effect and so on —

寺川 剛央
TERAKAWA Takao
(和歌山大学教育学部)

衣斐 哲臣
IBI Tetsuomi
(和歌山大学大学院教育学研究科
教職開発専攻)

飯村 浩晃
IIMURA Hiroaki
(和歌山大学教育学部
附属中学校・美術)

藤田 絵理子
FUJITA Eriko
(和歌山大学教育学部
附属三校)

受理日 平成31年1月21日

抄録：大学教員と附属中学校美術教師と教育相談心理士の三者協働により企画実践した中学校美術・陶芸授業における共同学習の取組を報告した。「土」を素材とした非言語性の活動は、生徒のほどよい創造的退行と生徒同士の人間関係形成力を促す効果があった。教員の協働立案が、生徒同士の協働、さらには生徒と教員の協働体験を生んだ。

キーワード：中学校美術・陶芸、共同学習、協働、人間関係形成力

1. 研究目的

本稿では、大学と附属中学の教員が協働して実施した中学校2年生を対象とした美術の陶芸授業の取組について報告する。協働メンバーは、陶芸を専門とする大学教員と中学の美術担当教員、そして教育相談担当心理士であった。立場の異なる三者の協働によって計画した陶芸創作活動のオリジナル授業を実施した。

一連の活動が、美術授業独自の表現・鑑賞活動による資質・能力の育成と、それを生み出す生徒同士の共同学習によって育まれる人間関係形成力の向上につながることを目的とした。その授業状況を記述し、生徒の反応および協働メンバーのふりかえりをもとに、授業実践ならびに成果について考察を加える。

2. 対象および方法

附属中学2年生の生徒を対象に、美術の「陶芸実習」授業として実施した。2年生は4学級編成で各学級35名、計140名が参加した。学級別に4学級1回ずつの授業を行い、時間は2限連続で100分間とした。

おもに前半50分で陶土に親しみ、後半50分で作品を作成した。

2.1. 授業前準備

授業に先立ち、生徒の「陶芸」への関心やイメージを高めるため「陶芸に関わるアンケート」用紙を渡し、宿題とした。内容は、陶芸経験を問うほか、自宅にある茶碗や花瓶などの陶芸品をイラストに描き、それが家にあるようになった経緯などを家族と話し聞き取る、さらに陶芸について書籍やインターネットで調べるなどであった。

2.2. 授業方法

[班形態] 他の授業でも活動をともししている4人1組の班で、作業机を合わせ、生徒同士が向かい合い対話と作業がしやすい形態で着席した。

[実習内容] 作業行程は以下のようである。

①作業開始前に、美術担当教師から授業の趣旨説明を行い、作業工程を理解させるため、事前に作成した約5分の動画¹⁾を大型モニターで映した。

②最初に、3色の陶土(赤土、白土、黒陶土)を用意し、

まずは陶土に触れ、さわり心地、色合い、匂いなど五感を通して、土特有の量感や質感を体験する。

③3色の土を混ぜ、4色目のブレンド土を班独自で作る。

④4色の粘土を組み合わせ、班員が交代で菊練り（土の中の空気を抜くねじりもみ）体験を行う。

⑤菊練りした粘土を直径10cm程度の円柱に形成する。

⑥円柱形の粘土を、円形たたら板（粘土を同じ厚みに切るための板）^{注1}を使いテグス（切り糸）で切る。

⑦切った円形粘土（コースター様のもの）から各自がお気に入りを選びサインを入れ、オリジナル作品とする。

⑧最後に、班および全員の作品を並べ鑑賞しあう。

以上の行程を基本に授業を進め、後日、対象生徒全員に実習のふりかえりをワークシートに記述させた。

3. 授業実践

3.1. 授業時の光景

4学級とも生徒の取組は積極的で良好であった。ある学級の様子をもとに授業の様子をレポートする。

①作業工程を映した動画を、生徒は熱心に視聴し、学習の見通しと理解が得られスムーズな流れを作ることができた。動画は、活動開始後にも生徒の要望に応じて流したり静止させたりして、作業の確認に用いた。

その後、安全面に配慮し、粘土には雑菌があることを説明し、手などに傷が無いかを確認させた。傷のある生徒や土への過敏性がある生徒には、ビニール手袋を配布し使用させた。

②そして、土に触れる体験に導入。ゆったりと時間を取り、3種類それぞれの粘土の硬さと柔らかさなど微妙な触感を鑑賞し、土という素材について班員間で話しあった。

③次の4色目の粘土づくりには、班でオリジナル色を出すよう課題が与えられた。赤、白、黒3色の土の色と量の配分をどのようにするか話し合い、実際に混ぜてみて話しあい、他者の意見を取り入れて再度試みる、など正解のない試行錯誤を繰り返す中で、それぞれの班で一定の調和が生まれ独自の色を作り上げた。

④今度はその4色の土を適宜組合せ、各班4名が交代で菊練り体験をした。この菊練りは、土の中にある空気を抜くために何度もねじりもみを繰り返すもので、力と共に鍛錬のいる作業である。陶芸を専門とする大学教員（寺川）が、授業内で見本を見せると、そのダイナミックな技に生徒からは驚嘆の声が上がった（図1）。



図1 大学教員による菊練りの実演

お互い意見や感想を言いながら、順番に交代して菊練りの作業を行った。上手下手の差が目立たない作業課題を班員で共有する時間は、相手を尊重した協調的な対話の時間でもあった。練ったのち、直径約10cm～15cm程度の太い円柱形に、陶土をまとめ上げた。

⑤その後、円形たたら板を使い、円柱を同じ厚さにカットしていった（図2）。役割を分担して、円柱の粘土を押さえる役、テグスで粘土を切る役、円形たたら板がずれないように押さえておく役の最低3人での共同作業である。役割を話し合いで決める班もあれば、自ら自発的に役割を引き受け自然と助け合いの作業ができあがっている班もあった。たたら板の枚数を増やして重ねると、厚みの異なる円板に切れることや、テグスを揺らしながら切ることで、断面の模様がさざ波のようになることに気づきメンバーにコツを教えたり、仲間の技術の上達を褒めあったり、創作の技術や技巧面の向上とともに、意見交換や役割分担などコミュニケーション力や社会性をうかがい知ることができた。



図2 班で協力し、たたら板を用い粘土をカットする

⑥今回の授業のクライマックスは、カットした断面に偶然生まれた予想外のきれいなマール模様が出現した時であった。その瞬間に教室のあちこちから、「きれい」、「かわいい」、「オーロラみたい!」、「予想外!」、「メインディッシュ」、「肉の脂身」、「牛タンみたい」、「アンモナイトみたい」などの大きな歓声が上がった。

一人一人が参画し皆の協力により、世界に一つだけのオリジナル共同陶芸作品が生まれた。作品名「マールハーモニー」の完成である。

⑦最後に、カットしたコースター型の粘土板を、自分



図3 マーブルハーモニーの鑑賞

のお気に入りの一枚として選択し、名前を記入し、一か所に集め鑑賞をおこなった(図3)。

同じ班でも断面模様が同じではないことやお気に入りの選択理由、他の班の作品と見比べた感想などが自由に語られた。他の教師や欠席の同級生にプレゼントするため念入りに作品を選ぶ生徒もいた。

3.2. 教員からのミニレクチャーおよびコメント

授業の終わりに、大学教員から「陶芸、土の独自性」についてのミニ講話を行った。趣旨は以下のようであった。

土は含まれる水分量によって姿を変える独特の素材である。水分が多いと泥水、やや水分が少なくなるとベチャベチャの土、水分が少なくなると柔らかい土、さらに少なくなると乾燥した硬い土になる。今回使用した土は、加工しやすいようにあらかじめ水分量を調節した「成形に適した硬さ」のものであった。その感触を、授業で十分実感し、この柔らかさだからこそ菊練りをすることができ、菊練りによって現れた模様の保持が可能であった。また、一旦硬くなってしまった土でも、徐々に水分を加え捏ねることで、また元の柔らかい土に戻すこともできる。反対に、熱を加えて「焼く」ことによって、形状を安定させ、長期間使用できるほど、丈夫な素材に変化する。

また、人間の歴史のなかで、土は食器や建造物など生活に密着した文化とともに芸術作品を誕生させてきたことにも触れ、専門家ならではの「土」という素材への敬意と愛着を込めた解説があった。

美術担当教師からは、本授業が陶芸技術習得のための実習というよりも、土に触れ一つの作品を他の人と協力しあって作るという共同体験の実習であったこと

を伝えた。心理士は「マーブルには、大理石の他に、輝くという意味があり、一人一人が作品と似て、唯一無二の輝く存在であり協力することで生まれた変化の面白さ楽しさを体験的に学ぶ」授業の企画意図を伝達した。

4. 授業後のふりかえりワークシートの回答(抜粋)

生徒にとって本授業がどんな体験であったのかについて、ふりかえりワークシートを作成し、授業の一環として記入を求めた。抜粋して記載する。

①「班で陶芸をしてどんな力がついたと思いますか？」

【回答】：協力／協調性／人を気遣う／楽しむ力／意見を共有する力／みんなの意見を聞いて合わせて行動する力／思いやりの力／自分のできることをして一つのことをする力／コミュニケーション／相談する力／自分の気持ちを伝え相手の気持ちを理解する力／団結力／苦手なところを補う力／何があっても最終まとまれる力

②「陶芸の世界は、やわらかさ、あたたかさ、五感で感じるという言葉がよく使われます。それは土の持つ性質が人と似ているからなのかもしれません。土と人の性質を、ベン図を使って整理してみましょう」

【回答】：他と合わさることで、よい土(人)になる／混ざると面白い／あたたかい／ひとつひとつ違う、個性がある／ふれあうと柔らかくなる。

②「今回の陶芸実習について感想を書いてください」

【回答】(協力・協調性・ハーモニーに関するもの)

「THE 道徳」みたいな授業だとおもしろくないけど、美術をしながら協調性を学べて楽しい授業でした／みんなで協力してできたので良かった／混ざり合ってよいものになる／仲良くなれて楽しかった／協力の重要さを学べた／他と調和すると別の輝きを発するのは人と似ていると思った／一人でやるより、みんなでやったほうが楽しいと思った／この4人でやらないとできない模様だったので、どんな模様になってもよかったと満足している。

(感覚的な感想)

土を感じて楽しい／さわり心地もよくて気持ちよかった／土にはそれぞれの柔らかさ、におい、感触などがあったので面白かった／柔らかくて気持ちいい／粘土はあたたかくて、やわらかくて人の手によって練られるとすぐ形が変わるから正直なんだと思った／土に対する気持ちのように、人にも自分自身を大胆に表すことが大切。

(意外性)

予想してなかったくらいのマーブル模様／断面の美しさにビックリ、わくわくしながら切った

(思いやりの心)

個性が生かされていた／個性の大切さを学べた／これ

からは、もっと「協力」、「人付き合い」という点に氣をつけて生きてみようと思う／人を優しくする気持ちと土に対する行動は似ている。

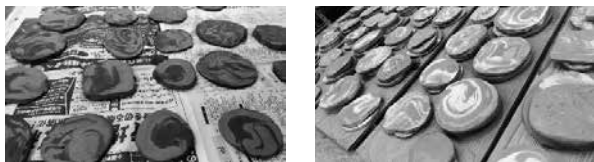


図4 マーブルハーモニー(左:授業完成時、右:焼上がり時)

5. 考察

5.1. 美術科における資質・能力および人間関係形成力

新学習指導要領(文部科学省,2017)²⁾では、美術の指導計画作成に関して「題材など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際、造形的な見方・考え方を働かせ、表現及び鑑賞に関する資質・能力を相互に関連させた学習の充実を図ること」(p.116)とし、内容の取り扱いに関しては「互いの個性を生かし合い協力して想像する喜びを味わわせるため、適切な機会を選び、共同で行う創作活動を経験させること」(p.134)と記された。つまり、美術固有の創造活動を班活動による共同学習として行うことが、美術科における「主体的・対話的で深い学び」の授業プランの一つとしている。

では、生徒が共同で行う創造活動がもたらす深い学びとは何か。それを本授業プランでは「人間関係形成力」とした。この用語は、学習指導要領のねらいにつながる考え方として提唱された「21世紀型能力」(国立教育政策研究所)³⁾の一つとして使われ、「人と新たな関係を構築し、良好な関係を作るコラボレーション力」を意味する。従って、本研究での協働プランは、美術科ならではの「見方・考え方」を反映させながら、そこでの体験を他者との良好な関係の中で共有し深めることをねらいとしたものであった。

5.2. オリジナル授業の企画について

今回の授業は、大学と附属中学校との連携事業の一環とした協働企画で、大学教員の専門性を日常の授業に組み入れたものにするという発想から始まった。協働メンバー間で「専門性」のコンセプトとして一致していたのは、「陶芸家でもある大学教員のほんまものの陶芸を生徒に見せたい」であった。それはメンバーが、授業準備の段階で、一心に菊練りの作業をする大学教員の姿を目の当たりにし、迫力に圧倒され感動したことから、美術における陶芸実習という授業イメージが固まった。同時に、メンバーは菊練り後にたたら板を使って切った粘土断面の美しさに強く魅せられ

た。この一瞬の感動と美、意外性の発見の魅力を、生徒にもぜひ体験させたいという思いに至った。

さらに、陶芸実習の共同学習のねらいは、通常授業でも一緒に活動している4人の班員の関係性をより活発にする、ということであった。3色の土を混ぜて4色目の土を作り、班員一人ひとりを表象する4色の土を、4人で混ぜ合わせることに心理的な意味を持たせた。そして、共同作業によりできあがった円柱型粘土を、4人で協力してカットしたところに驚きの「マーブルハーモニー」が出現するという、生徒4人が対話しながら作り上げる流れであった。

つまり改めてふり返ると、準備段階における協働メンバー間の対話は、既成の授業プランを超えたものを創出する過程であった。生徒の主体的な感動を演出することを中心課題として「土の感触を楽しむことに重点を置き、たっぷり味わわせたい」「器用さや出来の優劣を問わないものにしよう」「美しいマーブル模様をそのまま鑑賞させたい、そのためにカットしただけのコースター、あるいは小さな切り株のペーパーウェイトのようなものに留めよう」「作品の仕上がりに時間をかけずシンプルに共同作業を楽しむ授業にしよう」などの意見により、授業プランが固まっていた。

一連の対話は、メンバーの専門性が調和的に融合して深まったなかで交わされた体験であった。比喩的に言えば、メンバー自身が「輝く調和(マーブルハーモニー)」を体験した時間であった。陶芸の創造活動に触れて心が動かされ他者と分かち合う体験をベースにして企画されたところに、本授業のオリジナリティがあると考えている。

美術教師は、この一連の共同作業による実習を、陶芸の技術向上や上手な作品制作に重きを置いたものではないと生徒に伝えた。粘土という、素材を個別に五感で味わい、一つの作品を他者との共同作業により生み出す過程を純粋に体験してほしいという思いでもあった。

5.3. 生徒の体験～授業およびふり返しシートから

生徒の体験はどのようなものであったのだろうか。授業の様子やふりかえりシートの生徒のコメントから整理する。

「職人さんはすごかった」と、大学教員の菊練りの技に感動した思いが多く記された。「ほんまもん」のパフォーマンスが刺激になり、同じ作業にチャレンジする体験は生徒たちの参加意欲を高めた。「土」についてのミニ講話にも聞き入る様子がうかがえた。コメントでは、説明された土素材に対する特徴を実感した様子が書かれた。「円形たたら板」にも生徒らは関心を示し、役割分担が自然とできて対話する姿が見られた。コメントでは、協力することの重要性や美術をしながら協調性を学べたなどと表現された。

全般的に、生徒が楽しく参加している様子がうかがえた。単回の授業で上記の資質・能力や人間関係形成力が身につくことを期待するわけではないが、感動を伴う体験や他者と協働して成しえた体験は、強いインパクトを残したと同時に、このような創造活動を通した共同学習が生徒の人間関係形成力を高めるものであることが実感された。

5.4. 芸術療法の観点

本授業プランの意義を別の観点から眺める。美術や芸術における表現活動がもつ治療効果を心の治療や支援に用いる治療法を総称して芸術療法 (Art Therapy) と呼ぶ。表現に使う媒体の違いにより、絵画療法、音楽療法、ダンス療法、サイコドラマなどに分類され、陶芸を用いた造形療法もその一つである。特徴は、非言語の性質にある。言語表現では示されない意識下の葛藤や不安などの心模様が媒体を通じて表現される。それが心の癒やしやカタルシスを生む治療機序として活用される (伊藤,1992)⁴⁾。

粘土を使った共同作業は、不安を引き出すものでも心理療法でもないが、非言語の表現活動は論理性を後退させ、身体感覚や欲求、感情レベルを活性化させる。粘土遊びに象徴されるように土に触れる体験は、身体および対人緊張を下げ心地よい退行をもたらす。さらに、非言語作業への没頭は創造エネルギーを高める。この心的機制は「創造的退行」と呼ばれる^{注2)}。一方で、作品の優劣を問わない定型の作業工程は、生徒の心的現実を保護する役割となる。教室での授業という普段の保護された枠の中で、土に触れ、適度な退行が促され、織りなす色彩美に心動かされる体験は、生徒一人ひとりが仲間との共有感と同時に予定調和以上の調和を楽しむ時空間であったと考える。

6. まとめおよび今後の展望

陶芸を使った共同的な創造活動は、美術授業ならではの感動を伴う生徒の人間関係形成力を高める体験であった。同時に、企画にあたり協働したメンバーにとっても同様な体験であった。つまり、大学教員の専門的

な技と知識が、感動という心の動きをもたらし、それが動機づけとなって美術教師ならびに心理士の専門性を刺激し、オリジナル授業の企画ならびに実践へと進ませたものである。メンバーの協働により交わされた対話が、想定以上に生徒と教師との協働へと展開し、生徒だけではなく協働したメンバー自身にとって「主体的・対話的で深い学び」の体験となった。

「マーブルハーモニー」と名付けたこの体験が、生徒にとって今後も同様なインパクトのある授業形態となりえるかについては、今後の取組において検証する必要がある。

さらに平成30年度は、美術、金属加工分野を専門とする大学教員、附属特別支援学校教師、附属中学校の美術科教師、技術科教師、大学生、心理士との協働により、オリジナル授業を企画し実践している。その実践成果についても追って報告したい。

注1) 円形たたら板とは寺川自作の陶芸用のオリジナルツールである。中央部に粘土を置くことで、均等の厚さに水平にカットすることができる。外径20cm、内径15cm、厚さ5.5mmのドーナツ形状のベニヤ板製で、一般のたたら板よりも使用時のズレが少なく、生徒にも使用が簡便である。

注2) 心のバランスや芸術作品を生み出すための一時的で健全な退行で、赤ちゃん返りや病的退行などとは区別される。

引用および参考文献

- 1) マーブルハーモニー
作成手順動画のQRコード
(飯村)



- 2) 文部科学省 (2017), 中学校美術学習指導要領解説 美術編.
- 3) 国立教育政策研究所 (2016), 資質・能力を育成する教育課程の在り方に関する研究 報告書 5.
- 4) 伊藤俊樹 (1992), 芸術療法, 379-384, 氏原寛ら共編「心理臨床大事典」所収, 培風館.